

流麗な文章が生み出す、
豪奢にして繊細な作品世界——
これぞ文学の中の文学。
読むほどに、また格別の面白さ！

谷崎潤一郎全集

決定版
全26巻

中央公論新社 創業一二〇周年記念出版

中央公論新社



TANIZAKI
1886-1965

刊行ご挨拶

明治・大正・昭和の半世紀にわたり、常に進化したしながら、膨大な数の作品を書き続けた、まさに「文豪」の名にふさわしい作家、谷崎潤一郎。人間存在そのものに肉迫した傑作の数々は、没後五十年を迎えようとする今なお、日本のみならず海外でも高く評価されています。

谷崎の生まれた一八八六年（明治十九）は、くしくも小社創業の年でもあり、二十五歳のときの「秘密」をはじめ、「吉野葛」「盲目物語」「春琴抄」「細雪」「鍵」、晩年の「瘋癲老人日記」等、代表作の多くが雑誌『中央公論』『婦人公論』に発表されるなど、非常に強い関係を保ち続けました。

谷崎生誕一三〇周年と中央公論創業一三〇周年を記念して、その豊かな世界を網羅した、決定版「谷崎潤一郎全集」を刊行いたします。

中央公論新社

決定版全集の編集にあたって

二〇一五年は谷崎潤一郎の没後五〇年。この五〇年間に文学をめぐる環境は大きく変わったが、人間の生に根差した本源的なものをさぐり、それを魅惑的な物語に結晶させた谷崎文学は時代を超えて読み継がれてきた。時代は活字の文化からＩＴのデジタル文化へ移行したが、私たちが生きるうえに必要な物語の力を涸渇させてしまつてはならない。二〇世紀の日本文学において絢爛たる作品世界を構築し、馥郁たる物語性を発揮した谷崎は「大谷崎」と称され、半世紀にわたり第一線で活躍しつづけたその作家活動からは数多くの名作が生み出された。

今回の決定版「谷崎潤一郎全集」は、新たなコンセプトによって編成しなおし、使いやすく、読みやすくなるようにさまざまな配慮を施した。収載する作品の配列は、基本として作者の最終完成形を示す単行本の形式を復元させ、それに編年体の方式を加味した。また谷崎文学の研究者の力を結集し、これまでの谷崎全集にはなかった「解題」をはじめて付し、初出紙誌、初刊本などいくつかの本文を校合して、主なヴァリアントを記載した。「細雪」など原稿が現存しているものに関しては、原稿とも校合した。

決定版の名にふさわしいように、谷崎潤一郎の文学的な業績のすべてを網羅したばかりか、ご遺族の協力のもと創作ノートや日記、メモの類にいたるまで豊富な新資料を収めた。旺盛なる谷崎の創作の秘密を私たち読者に開示する、今後の谷崎研究には必須の全集である。ここから新たな谷崎文学の魅力も発掘し得るものと確信する。

編集委員

千葉俊二

明里千章

細江 光

奥



最初に読んだ谷崎の文章は、『陰翳礼讃』だった。それまで、大谷崎、というような言葉に怖じ気づいて遠ざけていたのが、すっ飛んだ。言葉は平易で、なにか読み易いの、最後までわかるということがない。わかるのだけれど、自分がわかつていることの奥にまだ何かがあるような心地なのだ。その心地が、たいそう快い。驚いて、続けていくつかの小説を読んだ。それぞれに異なり、けれどそれぞれに谷崎だった。谷崎の小説は、谷崎だ、

と表現するしかないような気がする。ほかに、似たものを読んだことがない。さっぱりしているのに、芳醇。怖いのに、わくわくする。そして、ぜんとたいにおいしそう。食べものが描かれているところでもなく、なんだかおいしそう。おいしそう、は、官能的、という言葉にも置きかえられるけれど、官能、という言葉では足りない気もする。そういうふうになんか感じながら読み終えると、またひとたび読みたくなる。それが谷崎というものなのだ。

谷崎礼讃
筒井康隆



「春琴抄」や「蘆刈」のように作者の見聞や記録の記述で読者におやこれはノンフィクションかと思わせながら徐徐に物語の核心へと導く手法と、マゾヒズムに近い自己犠牲。「丑（まんじ）」のように思わず笑い出してしまう途方もない饒舌。また谷崎自身が封建的ロマンへの憧れを抱きながら一方ではそこから脱出しようとする対創作的心情が「蓼喰う虫」では主人公に投影されていたりする。かと思えば谷崎のユーモア感覚炸裂の「武州公秘

話」における鼻が落ちた織部正の話し言葉に抱腹絶倒。「鍵」や「瘋癲老人日記」の老人性欲は若い時に読んでも早く老人にならなくなるほど蠱惑的だ。「痴人の愛」や「丑」の痴呆にまで至る情愛の強烈さ。古きよき時代の東京をたつぷりと賞翫できる「幼少時代」。滋味横溢の「陰翳礼讃」。その他すべての作品に及ぶ展開の妙。やはり谷崎は実に面白い。しかしまだ半分も読んでいないのだ。この全集で残りを読破したいものである。

帯をキュウキュウ
水村美苗



優れた芸術家は、その人にしか造り得ない固有の世界を造り、人類への贈物とし、土に還る。谷崎潤一郎がいなかったら、北斎やヘンデルがいなかったのと同様である。そこまで人に言い切らせる谷崎も幸せなら、その谷崎を原文で読める我々も幸せである。

小さい頃から谷崎が好きで、いずれ全作品を読みたいと思っていた。やがて異国の大学町で暮らすうちに、そんなことをしたら、日本に飛んで帰り、紅白粉をぬり、帯をキュウキュウと鳴らし、やれ

音楽会だ、花見だと人生を謳歌したいという、実現不可能な衝動にかられるだろうと思ひ、谷崎は避けるようになった。それが二十代の半ばを過ぎた頃である。意を決して全集を手に取りれば、そのようなことはなかった。ひたすら読む毎日だった。一卷から順繰りに読んだせいであろう。かくもめまぐるしく変化していった谷崎の世界が、これまで、どこまでも谷崎固有のものである事実が驚かされた。さらに充実した全集が出るのは人類への新たな贈物である。

全巻内容

※丸囲み数字は配本順です。なお、内容と配本順は予告なく変更されることがあります

第一巻 1

刺青〔刺青 麒麟 少年 幫間 秘密 象 信西〕 羹
〔羹〕 悪魔〔悪魔 続悪魔 The Affair of Two Watches
朱雀日記〕 単行本未収作品・雑纂〔彷徨 颯風 Dream
Tales * 門〕を評す ほか

第二巻 20

恋を知る頃〔恋を知る頃 誕生 あくび 恐怖〕 羹〔憎
念 熱風に吹かれて〕 麒麟〔捨てられる迄 饒太郎 春
の海辺〕 単行本未収作品・雑纂〔少年の記憶 劇場の設
備に対する希望 著者へ〔新聞記者の手帳〕*〕

第三巻 15

お艶殺し〔お艶殺し〕 お才と巳之介〔お才と巳之介〕 金
色の死〔金色の死 創造 独探〕 神童〔神童〕 刺青 外
九篇〔法成寺物語〕 単行本未収作品・雑纂〔懺悔話 華
魁 夢〔翻訳〕* ひとりごと*〕

第四巻 7

鬼の面〔鬼の面〕 人魚の嘆き〔人魚の嘆き 魔術師 病
蓐の幻想 鶯姫〕 異端者の悲しみ〔異端者の悲しみ 晩
春日記 玄舁三蔵 詩人のわかれ〕 単行本未収作品・雑
纂〔美男 亡友 ボオドレエルの詩* ほか〕

第五巻 18

二人の稚児〔二人の稚児 人面疽 ハツサン・カンの妖
術 兄弟 前科者 十五夜物語 或る男の半日 仮装会
の後〕 金と銀〔金と銀 白昼鬼語〕 単行本未収作品・
雑纂〔既婚者と離婚者 種 A Dialogue * 小僧の夢*
新年雑感* ほか〕

第六巻 8

小さな王国〔小さな王国 魚の李太白 母を恋ふる記

第七巻 19

柳湯の事件 人間が猿になった話 少年の脅迫 秦淮の
夜 蘇州紀行〕 呪はれた戯曲〔呪はれた戯曲〕 近代情
痴集〔富美子の足 西湖の月〕 ウェンダミーヤ夫人の扇
〔ウェンダミーヤ夫人の扇〔翻訳〕〕 自画像〔活動写真の
現在と将来 早春雑感 夏日小品 梅雨の書斎から 詩
と文字と 朝鮮雑観 支那劇を観る記 浅草公園〕 単行
本未収作品・雑纂〔ラホールより 檻樓の光 アツシヤ
ア家の覆滅〔翻訳〕* ほか〕 参考〔クラリモンド〔芥川
龍之介共訳〕*〕

第八巻 21

女人神聖〔女人神聖 美食倶楽部〕 天鷲絨の夢〔天鷲絨
の夢〕 恐怖時代〔恐怖時代 或る少年の怏れ 秋風 嘆
きの門 或る漂泊者の傍〕 単行本未収作品・雑纂〔真夏
の夜の恋 ボードレール散文詩集〔翻訳〕 或る時の日記〕
鮫人〔鮫人〕 AとBの話〔AとBの話 私 途上 不幸
な母の話 検閲官 鶴唳 月の囁き 蘇東坡〕 雑纂〔カ
リガリ博士〕を見る 出張撮影に就いての感想* ほか〕
参考〔アマチュア倶楽部*〕

第九巻 22

愛すればこそ〔愛すればこそ 永遠の偶像 彼女の夫
或る調書の一節〕 お国と五平〔お国と五平〕 愛なき人々
〔本牧夜話 白狐の湯 愛なき人々〕 藝術一家言〔藝術
一家言 ノートブックから 反古箱 日本の活動写真
映画雑感 支那趣味と云ふこと 永遠の偶像〕の上演 稽古場と
止 発売禁止に就て〔愛すればこそ〕の上演 稽古場と
舞台との間 女の顔 縮緬とメリンス 頭髮、帽子、耳
飾り 私をやつてゐるダンス 生れた家 私の家系 父
となりて 性質の違つた兄と弟 廬山日記〕 単行本未収

作品・雑纂〔奇怪な記録 序言（『炎外八篇』）* ほか〕

第十卷 14

アヱ・マリア〔アヱ・マリア〕肉塊〔肉塊〕無明と愛染
〔無明と愛染 腕角力〕単行本未収作品・雑纂〔蛇性の
姪 或る顔の印象 雛祭の夜 世界は書籍なり（翻訳）
妹 名妓の持つ眼 ほか〕

第十一卷 6

神と人との間〔神と人との間〕痴人の愛〔痴人の愛〕
雑纂〔上方の食ひもの 洋食の話「遊ばせ言葉」を廃止
すべし* 瀧田君の思ひ出 ほか〕

第十二卷 24

赤い屋根〔蘿洞先生 馬の糞 赤い屋根 友田と松永の
話 二月堂の夕 港の人々 金を借りに来た男 マンド
リンを弾く男 白日夢〕近代情痴集〔新潮文庫〕〔青い花
続蘿洞先生〕饒舌録〔饒舌録「九月一日」前後のこ
と 阪神見聞録 上海交遊記 上海見聞録 グリープ家
のバアバラの話（翻訳）〕単行本未収作品・雑纂〔為介
の話 一と房の髪 都市情景 うめとさくら* ほか〕

第十三卷 4

潤一郎犯罪小説集〔日本に於けるクリップン事件 或る
罪の動機 黒白 卮（まんじ） 卮（まんじ）〕雑纂〔関
西文学の爲めに 猫を飼ふまで* 芥川君の計を聞いて*
彼は如才がない* ほか〕参考〔卮（まんじ）〕〔改造〕
掲載初出文*〕

第十四卷 9

日本探偵小説全集 第五篇 谷崎潤一郎集〔青塚氏の話〕
蓼喰ふ虫〔蓼喰ふ虫〕単行本未収作品・雑纂〔顕現 ド
リス カストロの尼（翻訳） 三人法師 藝術の一種とし
て見たる殺人に就いて（翻訳）* 現代婦人の服装* 食
味漫談* 岡本にて カフェー対お茶屋 女給対藝者 料
理の古典趣味 ほか〕

第十五卷 10

乱菊物語〔乱菊物語〕盲目物語〔盲目物語 吉野葛 紀

伊国狐憑漆掻語 覚海上人天狗になる事〕雑纂〔春寒
大衆文学の流行について 離婚挨拶 倚松庵詠草（『スバ
ル』）* ほか〕

第十六卷 16

武州公秘話〔武州公秘話〕倚松庵隨筆〔懶惰の説 恋愛
及び色情 現代口語文の欠点について「つゆのあとさ
き」を読む 私の姓のこと 私の見た大阪及び大阪人
佐藤春夫に与へて過去半生を語る書〕青春物語〔青春物
語 藝談〕雑纂〔正宗白鳥氏の批評を読んで 倚松庵詠
草（未発表原稿）* むかしばなし* 新聞小説を書いた
経験* ほか〕

第十七卷 5

蘆刈〔潤一郎自筆本〕〔蘆刈〕春琴抄〔春琴抄 顔世〕
摂陽隨筆〔陰翳礼讃 春琴抄後語 装釘漫談 文房具漫
談 直木君の歴史小説について 東京をおもふ 私の貧
乏物語 大阪の藝人 半袖ものがたり〕鶉鷗離雑纂〔厠
のいろく 旅のいろく〕単行本未収作品・雑纂〔葦
崎氏の口よりシユパイヘル・シユタインが飛び出す話
夏菊 岡田時彦弔辞 文運の進歩* 言葉* ほか〕

第十八卷 13

文章読本〔文章読本〕聞書抄〔聞書抄―第二盲目物語〕
猫と庄造と二人のをんな〔猫と庄造と二人のをんな〕
初昔 きのふけふ〔初昔 きのふけふ〕単行本未収作品・
雑纂〔木影の露の記* 身辺雑事* おばんざい* 潤一
郎六部集について* 田舎料理* 自由劇場の再挙に際し
て* ほか〕

第十九卷 2

細雪〔細雪 上巻 細雪 中巻〕雑纂〔源氏物語の現代語
訳について 二つの意味に於て* シンガポール陥落に
際して 莫妄想 追憶二つ三つ* ほか〕

第二十卷 3

細雪〔細雪 下巻〕磯田多佳女のこと〔磯田多佳女のこと
と〕都わすれの記〔都わすれの記〕月と狂言師〔梅田
書房版〕〔月と狂言師〕月と狂言師〔中央公論社版〕〔雪

所謂痴呆の藝術について 同窓の人々「潺湲亭」のことその他 客ざらひ 疎開日記」 雑纂〔露伴翁追悼講演会に寄す 私の対談について*「細雪」回顧 ほか〕

第二十一卷 12

京の夢大阪の夢「京洛その折々」 少将滋幹の母「少将滋幹の母」 少将滋幹の母 乳野物語「乳野物語」 幼少時代「幼少時代」 雑纂〔安倍能成氏への書翰 嶋中雄作弔詞「人の和」の勝利* ほとゝきす* ほか〕

第二十二卷 25

過酸化マンガン水の夢「過酸化マンガン水の夢 A夫人の手紙 小野篁妹に恋する事 上山草人のこと 或る時」 歌々板画巻「歌々板画巻*」 鍵「鍵」 夢の浮橋「夢の浮橋 親不孝の思ひ出 高血圧症の思ひ出 四月の日記 文壇昔ばなし」 単行本未収作品・雑纂〔近來の快挙*「マンドリンを弾く男」について* ほか〕

第二十三卷 23

三つの場合「三つの場合 吉井勇翁枕花 若き日の和辻哲郎 古川緑波の夢 伊豆山放談 幼少時代の食べ物の思ひ出 日本料理の出し方について おふくろ、お関、春の雪 親父の話 或る日の問答 千萬子抄」 当世鹿もどき「当世鹿もどき」 単行本未収作品・雑纂〔老後の春 残虐記 明治回顧 私と国歌大観 審査員の言葉*〕

編集委員

千葉俊二

(早稲田大学教授)

明里千章

(千里金蘭大学教授)

細江光

(甲南女子大学名誉教授)



あの頃のこと ほか〕

第二十四卷 11

瘋癲老人日記「瘋癲老人日記」 台所太平記「台所太平記」 雪後庵夜話「雪後庵夜話 京羽二重 京都を想ふ 四季女優さんと私 わが小説——「夢の浮橋」 「越前竹人形」を読む 「撫山翁しのぶ草」の巻尾に「笹沼源之助追悼」 野崎詣り（池崎忠孝回想） おしやべり にくまれ口 七十九歳の春」 雑纂〔千萬子からの雪だより 自分の好きな作品を* 吉井勇全集序* ほか〕

第二十五卷 17

初期文章「狎の葬式 うろおぼえ 死火山 ほか」 談話筆記 創作ノート「松の木影* 続松の木影* 潺湲亭* 子* 丑* 武州公秘話ノート* シングレランノート* 七十九の春ノート* 覚醒剤に関する筆記* 幼少時代メモ* 絶筆メモ*」 歌稿「ありのすさび* 松廼舎集* 初昔きのふけふ*」

第二十六卷 26

日記「昭和33年7月11日〜38年2月4日」* 記事* 草稿* 略年譜 著作目録 著書目録 著作索引
(太字は単行本タイトル、*は全集初収載作品です)



●—新発見資料の白眉！ 幻の創作ノート「松の木影」

本全集に初めて収載される作品は実に 150 点に及び、傑作誕生の秘密に迫る創作ノート 11 冊も一挙に公開される。中でも注目すべきは、戦災で焼失したと考えられていた最初の創作ノート「松の木影」。

「春琴抄」「陰翳礼讃」「聞書抄—第二盲目物語」「猫と庄造と二人のをんな」「細雪」等の作品執筆に際してのネタ帳とも言える詳細なメモで、昭和 8（1933）年 2 月から昭和 13（1938）年半ばにかけてのものと推測される。いくつかの作品の構想が同時並行的にさまざまに試行錯誤され、作家周辺の人々に関するエピソードも大量に書き留められている。谷崎文学の一つのピークをなす「春琴抄」執筆以後、新たな傑作を生み出すための模索を続け、やがて「細雪」に結実していく過程も生々しくうかがうことができる。

この「松の木影」の存在が明らかになるや、文学史的な事件であり質的にも量的にも戦後最大級の発見と、テレビや新聞で大きく報じられた。



● 約 16 × 23 センチの大きさの印画紙に焼きつけられた状態で見つかった「松の木影」は全 255 枚。戦争中、空襲などで焼失してしまうことを危惧した谷崎が、ノートを撮影したものを友人に預けたと推測される。



没後50年・生誕130年——谷崎への関心高まる！

◎山梨県立文学館、神奈川近代文学館、北海道立文学館ほかで特別展開催

◎NHK「クローズアップ現代」「歴史秘話ヒストリア」「妖しい文学館」「ラジオ深夜便」、テレビ朝日「マツコ&有吉の怒り新党」等で話題沸騰

◎2015年3月「はじめての谷崎潤一郎」（朝日新聞）、4月「幻の創作ノート発見」報道（読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、産経新聞はじめ、ブロック紙、地方紙）、6月「谷崎潤一郎全集新時代開いた作家の全貌」（読売新聞読書面）、8月「時代超え魅力放つ」（北海道新聞夕刊）等に掲載

体裁

- ◎四六判上製・函入り 各巻約600ページ
- ◎装幀 ミルキィ・イズベ
- ◎装画 山本タカト
- ◎豪華執筆陣によるエッセイ掲載の月報付き
- ◎各巻定価 本体 **6,800円**(税別)
全巻揃定価 本体 **176,800円**(税別)



本全集の特色

◎**充実の解題**……本文が確定するまでの改稿、改訂の経緯など、最新の研究成果を盛り込んだ解題を各巻に付す。発表当時の創作意識にも迫ることができるように、初出紙誌、初刊本などいくつかの本文を校合して、主なヴァリエーションを記載。「細雪」など原稿が現存しているものに関しては、原稿とも校合した。

◎**編年編集で業績を一望**……デビュー作「刺青」から、晩年の「瘋癲老人日記」、絶筆「七十九歳の春」にいたるまで、すべての作品(『源氏物語』現代語訳を除く)を、単行本ごと、執筆時期ごとにまとめる。また、同時期に書かれた随筆、短文も同じ巻に収載し、作風の変遷や創作の背景を明らかにする。

◎**新資料を満載**……全集未収の創作ノート全11冊、新たに発見された晩年の日記8冊など、創作と生活の秘密に迫る貴重な新資料をはじめとして、初収載の作品は150点以上。

◎**新字旧かな**……著者の意向を尊重しながら、現代の読者にも読みやすい本文とするため、新字旧かなを採用。

中央公論新社 営業局 〒100-8152 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL:03-5299-1730 FAX:03-5299-1946

帳合・貴店印 申込書		谷崎潤一郎全集 〈決定版・全26巻〉	
☐ 第1回配本より全巻お申し込み		☐ ご希望巻のみお申し込み ※巻数をご記入ください	
☐ 第 回配本より全巻お申し込み			
お名前		お電話番号	
お申し込み日	年 月 日	ご担当	様

※お客様の個人情報、お電話番号などの個人情報は、本企画以外には使用しません